

今、振り返る教師としての原点

私を育てた あの時代、あの出会い

徳島県立徳島科学技術高校

阿部憲市

生徒の心に働き掛ける指導が 教育の原点であることを知った

教科の指導技術が高ければ、生徒を成長させることが出来る——そう考えて
気負っていた若い自分を変えた一人の先輩との出会い。その背中を追い掛けて
必死で模倣し、自分の血肉としていった日々を、阿部憲市先生が振り返る。

赴任早々に味わった挫折感



この学校で実績を出せなければ一流の教師にはなれない

かもしれない——7年目に赴任した徳島県立城北高校が県下屈指の進学校だったため、私は相対のプレッシャーを感じていました。その頃の私が目指していた「一流」とは、担当教科の数学で生徒をぐいぐい引っ張る教師。教科の指導技術さえ高ければ、生徒を成長させることが出来るかと考えていたのです。

そうした私の教師観を根本から変えてくださったのが、当時進学課長だった村田和生先生です。赴任前、前任校の同僚から

「城北高校には教科指導も進路指導も生活指導も出来るすごい先生がいる」と、村田先生のことは聞いていました。その第一印象は「怖い」の一言。威厳があり、気軽に話し掛けられる雰囲気ではありませんでした。

1年生の担任となった私は、すぐに挫折感を味わいました。城北高校の数学は進度が速く、その日の授業ですべきことが時間内に終わらないのです。また、担任として学力を低迷させたくないという思いから、「勉強しなさい」と連呼していましたが、生徒の心には届かず、クラスはまとまりを欠いていました。当初の私の意気込みは空回りしていたのです。

私のそんな悩みを見透かして

いたのか、ある冬の日、私は村田先生から「〇日、時間を空けておけ。飲みに行くぞ」と声を掛けられました。日々の指導が思うように出来ていなかった私は、逃げ出したい思いでしたが、まさか嫌とは言えません。

当日は、ライバル校の進学課長と学年主任の先生がいて、城北高校の教師は村田先生と私だけでした。どうして私が呼ばれたのかと不思議でなりませんでしたが、後になって「お前に期待していたから」と言ってくださり、心からありがたく思いました。その席では、重鎮に囲まれた緊張から、私は貝のように口を閉ざしていましたが、先生方の教育談義を通して深い見識や指導の在り方を学びました。

生徒の心に働き掛けるために

これを機に徐々に村田先生から指導していただくようになりました。先生から繰り返し伝えられたのが「生徒の心に働き掛ける」という言葉です。当時の私は教科指導ばかりに目が向いていました。しかし、まず教師が生徒と心を通わせなければ、生徒を成長させることは出来ないというのが村田先生の考えでした。そのためには、何より面談が大切と教えられました。

私は村田先生の面談の方法が気になり、進路室で仕事をする振りをして、村田先生の面談を拝見しました。その方法は独特で、1人5分か10分で話は終わり、それを全員に毎月行うので

先輩教師の言葉

教師に志がなければ
生徒に高い志を
持たせられない

徳島県立富岡西高校校長
村田和生



赴任当初の阿部先生のこととはよく覚えていますが、元

気があって何事にも一生懸命な若手が来たなと思います。ただ厳しい言い方ですが、我々はプロですから、基本的な指導は出来て当たり前。私は滅多なことでは褒めませんから、厳しい先輩だと思われていたのは当然でしょう。

私が若い先生方に厳しく接するのは、高い志を持つてほしいからです。教師に志がなければ、いくら生徒に「志を持って」と言っても空言にしかなりません。阿部先生にはよく「県下ナンバー1のクラスをつくれ」と発破を掛けていましたが、それくらいの意気込みがなければ、教師も生徒も成長しないのです。

左 むらた・かずお 理科。新野高校、城北高校などを経て、日和佐高校(2006年3月閉校)、城ノ内高校で教頭を務める。08年度より徳島中央高校校長、10年度より富岡西高校校長。

撮影○城北高校にて

右 あべ・けんいち 数学科。富岡西高校、城北高校などを経て、現在は徳島科学技術高校に勤務。2012年度より進路指導主事、進学課長。



す。早速、それをまねてみると、生徒との距離が徐々に縮まっていきました。面談を重ねることで生徒の学力や心境の変化を細かく把握できるようになり、的確な助言を行えるようになったからです。また、生徒が家庭で面談の内容を話すことで、保護者との信頼関係も深まりました。

村田先生は「感動」という言葉もよく使われました。担任の頃は、「学校行事での感動が大きいほど、受験への切り替えもうまくいく」を持論に、学校行事の賞を総なめにするようなクラスをつくったそうです。私も学校行事に一生懸命になれるクラスづくりを心掛けました。すると、本当に進学実績が向上したのです。「受験は団体戦」という言葉の意味を噛み締めながら、教科指導だけで生徒を伸ば

そうとした自分の考えの浅はかさを感じました。村田先生から学んだ生徒の心に働きかける指導は、その後の私の教師人生を決定付けるものでした。現在の勤務校と当時の城北高校とは生徒の状況は異なりますが、生徒一人ひとりの心に迫り、自ら学ぼうという気持ちを引き出す指導の大切さは全く同じです。担任を務めていた昨年

度までは、やはり毎月の面談を欠かしていませんでした。進学課長になった今年度は、教師の結束力で生徒を育てることが課題です。困った時は「村田先生ならどうするか」と考えます。最近、ついに口癖まで似てきたような気がします。村田先生から受け継いだ教えをいかに次の世代に引き継ぐか、それが私の当面のテーマです。

阿部先生はその思いをしつかりと受け止めて、私の話を素直に聞くだけでなく、それを実際にまねていました。教師にとって先輩教師の良いところをまねすることはとても大切で、初めから下手に自分を貫こうとしてもうまくいきません。ただし、まねで終わってしまうのもだめで、そこに少しずつ自らの個性を加味して、自分の血肉としていかなくはなりません。阿部先生にそれが出来たのは、常に向上心を持ち続けていたからでしょう。

私はたびたび「3掛け」が大事だとも話してきました。それは生徒に対する「目掛け・声掛け・手間掛け」です。特に近年はパソコンの普及などにより、手間を省く教師が増えたように感じます。しかし、調査書もパソコンで作るより手書きの方が内容が頭に入り、生徒の状況をしっかりと把握できます。時代が変化する中で、「3掛け」をいかに守っていくかが、生徒との心の距離を縮める鍵だと私は思っています。そうした教育を、阿部先生をはじめとした次世代のリーダーたちが若い世代に伝えてほしいというのが、私の願いです。